知らぬ葬列

ペ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
知らぬ葬列

【Ｎコード】
Ｎ４６３７Ｉ

【作者名】
ぺ子

【あらすじ】
クラスメイトの誰かが死にました。その人が誰か分からないまま葬式に出ました。

まるで形だけの葬儀だった。そこにいる人々は彼の名前以外、いや名前さえ把握していなかった者もいるはずだ。彼の出席番号、好きなもの、嫌いなもの、得意な科目、苦手な科目、趣味、特技、電話番号、メールアドレス…、彼の中にある様々な要素達。それをたった一つでも知っている人間は、この白い制服を身に纏った集団にいるだろうか。それは0という数字に相等する。

彼の死因すら分からない。ただ朝のHRで教壇に立った教師が「亡くなったそうだ」と、たった一言クラスメイトに声を掛けただけだ。口から出た言葉達は教室の空気に溶け込み生徒達の耳に入る。この世に彼という人間がいなくなった事実だけを知ることができた。たった一つの事実、たった一つしかない事実。感情など表れたりしない。いなくなった、そう思うだけ。

パイプ椅子に座り太股に拳を乗せる。彼の両親が泣きながら最後の言葉を送っている。正直、嗚咽と声の震えで何を話しているのか理解できない。悲しみを身体すべてを使って表現しているように見えた。すると隣に座っていた女子がすすり泣きを始める。しかしそれは彼が死んだ事に対してではなく、彼の両親の気持ちを想像してだろう。確かに可哀相だと思うが、涙なんて出てこない。

彼の顔や声はどんな風だったか。彼の体型が痩せていたり肥満気味だったり筋肉質だったり、そんなことを考えたところで自分は何も知らない。何も思い出せなかった。ここまで彼について何も知らないと恐ろしく感じた。まるであかの他人の葬儀にこっそり出席しているような気分だ。少なからず、ここにいる生徒は自分と同じ感覚だろう。

棺の中で眠る彼は案外あっさりとした顔だった。陸上部に所属、得意科目は数学といったところだろうか。あくまで自分の印象にす

ぎない。彼について何も知らないのだから。

黒い車が彼の身体を乗せて走って行った。これが本当の別れだ。しかし、彼と出会っていないのだから別れにもならない。

「なあ、あいつどうして死んだんだ？」

「知らない。でも死んでたな」

「ああ。俺、初めてあいつの顔見たかも」

彼の話題を話しながらだらだらと歩く。誰も彼の名前を出さない。

教室の扉を開けると真っ先に花瓶が目に入った。透明な花瓶が教室から差し込む陽の光を吸収し光っていた。挿された花は飾られている理由が分かっていないかのように項垂れている。教室の中央、教壇から真っ直ぐ伸びた席は紛れもない彼の場所だった。座ってみると、彼の普段見ていた視界が少しだけ分かった気がした。黒板を見ようとすると必ず彼の席が視界に入る。四方八方から注がれる視線に彼はどう感じていたのだろうか。

「あ、俺分かった。あいつ確か出席番号９番だ」

「え？じゃあ俺の後ろじゃん。日誌見れば分かるけど」

日誌を開けてみると彼が死ぬ二日前の、彼自身が書いた日誌記録があった。彼の字は最後に見た顔と同じように癖のないあっさりとした字をしていた。

最初で最後に見る彼の文字。そして彼の言葉。彼がいた存在の証。彼は何を心に抱えながらこの場所にいたのだろう。なぜ、彼は死んでしまったのか。今更になって思いがいくつもいくつも浮かび上がってくる。

「あいつ…自分で自分をやったのかもな」

誰かに力強く心臓を掴まれているような痛みがした。痛くて苦しかった。唇が震えそれを必死で抑えようと手を添えた。初めてだった、怖かった。彼は死んでしまった、誰にも気づかれず死んでしまった。存在していたはずなのにそこにはいなかった。

「俺、あいつのこと何も知らなかった。誰にも、誰にも知られないって、誰にも気づいてもらえないって…どんな気持ちがするんだろうな」

その場にいた人間は一瞬にして表情を曇らせ、そこで初めて彼という存在に気がついた。しかし、もうすべてが遅かった。彼は既にこの世にいないのだから。孤独という名の殺人鬼に彼は連れて行かれたのかもしれない。筆圧のない薄い字で、淡々と他人事のように書かれていた。

“いつだって彼は独りでした”

（後書き）

サイトに掲載しているものを訂正加えたもの。
知らない人の葬式に出るってどんな気分なんでしょうね。
やっぱり悲しいのかな、なぜかあとで後悔するような気がして書きました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4637i/

知らぬ葬列

2011年10月6日01時39分発行